

平成 22 年 12 月 18 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

平成 22 年 第 10 回講話

辛卯 - 干支からみる平成 23 年 -

今日、皆様にご紹介する資料は、去年の季刊誌「知足」1月号(第8号)の「干支で考える日本と世界」という部分です。その中で、次のように話をしています。

平成 23 年は辛卯(しんぼう・かのとう)です。辛いという文字ですから、これが今回の経済不況の底になると思っています。「この人だ」というニューリーダーが出てきた翌年が、凄まじく落ちて惨い年になると思います。

私は経済破綻を起こした国々を見て回りましたが、中でも一番悲惨だと思ったのはロシアです。ソ連からロシアに変わった時に、凄まじいデノミをしました。国民を裏切るデノミです。例えば 1 万円を 1 円にした時、価値まで 1 円にしたようなものですから、金持ちが皆、貧乏人になりました。貧乏人が乞食になりました。自給自足が出来ない人は飢え死にしました。数千万人の単位で死んだと推測しています。そのように惨く辛い年になるのが平成 23 年だと思っています。

平成 24 年からは浮上し始めて、明るい年になる兆しが出るだろうと思います。それまで長いですね。これは日本の動きだけでなく、世界の動きと連動していますから、安岡干支学をもとに、様々な視点で判断すると良い。アメリカの動き、世界各国の動きと照らし合わせながら、判断を変えていくものだと思っています。

来年は辛卯(しんぼう・かのとう)という年回りです。安岡干支学では 60 年周期で物事を見ますので、60 年前の昭和 26 年はどういう年だったか、その 60 年前の明治 24 年はどういう年だったか調べました。

昭和 26 年の 2 月 14 日、東京を猛吹雪が襲って交通機関がストップしました。3 月 9 日と 4 月 16 日に三原山で大きな噴火がありました。10 月 14 日、ルース台風が襲来し死者・行方不明者が 1200 人出ました。又、この年はサンフランシスコ講和会議が開かれ、対日講話条約や日米安保条約の調印がされましたから、少し明るさが見えてきている頃です。少し変わったところでは、力道山の日本人初のプロレスの試合がありました。

こういった内容を今度の「知足」(1月1日号)に書きましたので、お手元に届きましたらお読み下さい。社会が大きく変動する時は、だいたい何か大きな自然災害が起きます。中斎塾フォーラムの大野参与は鳥の新型インフルエンザの専門家です。昨年日本で流行った新型インフルエンザは弱毒性ですから気楽に流しましたが、来年は強毒性の新型インフルエンザが出ると思います。かなりきな臭い話を大野参与から聞いておりますので、機会を作って大野参与に最新のニュースを話して戴こうと思っています。

辛卯を文字から考えます。辛は辛い・酷い・苦しい・残酷という文字ですので、来年は辛くて酷くて苦しくて、のた打ち回るといふ年です。卯は、「卯す」と書いて、「ころす」と読みます。ですから、来年は色々な形で死ぬ人がかなり出ると思います。例えば、先日取手駅前で刃物男がバスに乱入した事件がありました。人を殺すつもりはなく、自分の人生を終わらせるつもりだったという中途半端な事件でしたが、来年は、秋葉原の無差別殺人事件のような物騒な事件が各地で起きるかもしれません。閉塞感が酷すぎますし、食べるものが食べられなくなりますから。

この間お聞きした話ですが、生活保護を希望するホームレスの人を連れて申請に行ったNPO法人の人が、役所の人から「今日の申請は勘弁して下さい」と断られたそうです。前日に共産党の人が生活保護を希望する人たち100人を連れて来て一斉に申請したので、その処理が追いつかないという理由でした。ですから中身の審査をしている暇がないのが現状でしょう。今の行政では、予算に関係なく、生活保護の申請が来たら受け付けなければならない仕組みになっています。これが飛び火して、私は来年あたりどこかの行政がパンクするだろうと思っています。さもないと、パンクしそうだとマスコミで大きく取り上げられると思います。生活保護費が予算の半分を占めるようになったら、どうにも身動きつかないですから。

ということを見ると、来年は辛くて・酷くて・苦しくて、沢山人の死ぬ年です。ですから自己防衛を怠らないようにして下さい。本氣になって自分自身はどうやって生き延びていこうか考える、正念場の年です。来年の暮れが、坂を転げ落ちているという実感を持つ年になると思います。ですからまだ一年弱ありますので、対応を考えるとよろしいでしょう。

今年一年を振り返って・・・

では、今年一年を総括しましょう。

今年1年間、嘘をつくことが多かったなと思う人？

・・・手が拳がらない。

今日、お読み戴いた論語を洪沢栄一さんが解説をしている中で、嘘の極まりだという文章があります。「子 喪有る者の側に食すれば、未だ嘗て飽かず。子 是の日に於て哭すれば、則ち歌わず」という論語の解説で、洪沢さんが生きておられた頃の中国の現状は嘘の塊ではないかと言っています。お葬式があると、近所や親戚の人がワッと集まってお手伝いに行くけれども、食事目当てで、その人の喪を心から悼み悲しむのでない。お葬式を出す家の人は、涙を流し大声で泣いてくれる泣男・泣女を雇って、本当に悲しいのだと思わせるような葬式をする。貧乏人は一度葬式を出したら、2、3年はその借金に苦しめられる。これは虚言の極まりである、という書き方をしています。

翻って日本の場合も、お葬式に参列しているどこまでの人が嘆き悲しんでいるのか、どこからが義理で参列しているのか分かりません。或いは興味半分で参列している人もいるのではないかと思います。

嘘には、ついてよい嘘と悪い嘘があります。ついてよい嘘とは、人様のためになる嘘です。例えば、交通事故で瀕死の重傷を負っている人に、もう助からないだろうと思っても、普通は「傷は浅いぞ、しっかりしろ」と言いますね。そうすると本人も、氣の持ちようで大丈夫かと思う。更に医者の手当てが良ければ助かることも多い。「傷は浅いぞ、しっかりしろ」という言葉は紛れもなく嘘なのですが、人の命を守る嘘ですから悪くはないと思っています。人様のためになる、人様の命を守るような嘘は許されると思っています。動機と結果を考えて、自分がついた嘘によって自分の心が痛んだかどうか、結果として人様に迷惑をかけたかどうかで、ついてよい嘘か悪い嘘か判断できます。嘘をつかなければならない破目に陥った時に、私利私欲や自分の欲望のために嘘をつくのだったら、それはついてはいけない方の嘘に入ります。判断基準は簡単です。自分の心が痛まなければ、良いほうの嘘に入ります。自分の利益になるなと思いつつ嘘をつく、何となく心がチクチクします。

今年1年間振り返ってみて、良い年だったなと思える方？

良いことが沢山あって今年良かったという方、今年色々な問題があってあまり良い年ではなかったと思った方、皆さんはどちらでしたか？ とにかく最後は自分の心の中で「良かったな」と思えるように、悪いことが多くても良いものを拡大解釈して、「良かったな」と思う気持ちで心を満たして1年を過ごす。そういう生活習慣が出来れば良いと思います。

今年1年を振り返って、「有難う」と言い、「有難う」といわれることの多い年だっ

たと思う方？

もう一つお聞きします。

仕事をしていると、色々な縁が広がりますが、皆さん年の初めに、今年は仕事をどうしようか、人間関係をどうしようか、人脈を広げようとか整理しようと思ってスタートしたと思います。そこで、

今年1年間で、人脈が自分の思ったようになったという方？

これは最初に思わないと話になりませんが、思ったならば1年最後の締めくくりで、どうだったか反省するとよろしい。

1年間の自分自身の心の整理・物質的な整理が終わって、来年はこういう事をしたいと計画を練っている方？

皆さん凄いですね。大多数の人が手を挙げて下さいました。

壮絶な人生

東京フォーラム会員の竹岡さんが本を出版されました。5月の山田方谷先生の墓参りを兼ねた先哲探訪の旅にも参加されて、その時の旅行記を季刊誌に寄せて下さいましたが、それも本の中に入っています。先日、出版記念パーティーが開かれて、私と常任理事と事務局長が出席致しました。

席上で三浦雄一郎さんが挨拶をされましたが、非常に新鮮な感動を受けました。三浦さんは七大陸の最高峰をスキーで踏破しておられます。三浦さん曰く、「スキー場は人間が作ったものだからおもしろくない。大自然の中で、その大陸の一番高い所から滑るのが実に良い気持ちなのです」とおっしゃっていました。会場のスクリーンに三浦さんが滑っている映像が映し出されましたが、非常に印象深いものが3つありました。一つは、滑り始めた途端にクレパスがあって、悲鳴だけ聞こえて本人は落下してしまっただけで、もちろん命綱がついていますから途中で引っかかって引き上げてもらったのですが、もの凄く映像でした。二つ目は、滑り始めてスピードがついてくると、スピードを落とすために落下傘が開くのですが、滑るというよりは急坂をゴロゴロ転がりながら落ちていく映像でした。当然、本人は意識がなくなっていたそうです。気がついたら、片足分のスキーが目の前にあったので、必死になってそれを抱きかかえて、立て直して生還したそうです。もう一つは、滑り始めたところを雪崩に巻き込まれて、意識をなくしてふっと気がついたら、雪崩が最後に山になった頂上にゴミのように自分の体が置かれていたそうです。全てに共通してい

ることが、意識がなくなっていたということです。意識があって、もがいていたなら死んでしまったでしょう。意識がなくなって、力が抜けていたから生還したのだと思います。幽体離脱のように、自分の意識が上から見下ろしているのだと思いますが、何か気持ちの良い暖かいところにいると感じたそうです。「命がけのことをするというのは、実に気持ちの良いものだ」と言っておられました。

それだけ凄まじい壮絶な冒険をしている人が、六十代になる前に大体自分のやりたいことはやってしまって目標がなくなってしまうたら、人間の欲望で、食べたいものを食べ・飲みたいものを飲んでメタボリックのお手本のような身体になってしまったのだそうです。奥様に病院に連れて行かれて、肥満・高血圧・高脂血症・糖尿病の「死の四重奏」と診断されてしまった。そんな時に、三浦さんのお父様が99歳の白寿でモンブランにチャレンジをしたので、負けてはいられないと一念発起して自分の身体を鍛え直して、もう一度挑戦しようと思ったそうです。自分の身体がどの程度かを調べるために家の近くの500メートルくらいの小高い丘に登ったところ、息がきれてうずくまってしまった。そこから5年後に、70代でエベレスト登頂を成し遂げたのです。

今日の論語

では解説を致します。本日の論語は述而第七 1~9です。

【一】 子曰く、述べて作らず。信じて古を好む。竊に我が老彭に比す。

孔子が言うには、昔の人が言ったことを私は受け伝えていくだけで、自分で考えて自分で発表しているわけではない。昔の人が言ったことを信じて疑わずにお伝えしているのだ。私は誰にも言わないけれども、殷の時代の賢人である老彭をお手本にして努力しているのだ。

渋沢栄一さんはこの「老彭に比す」を真似して、「私は孔子をお手本にして、孔子がやっていることを自分も実行したいと思って、一生を送った」と書き残しています。やはりお手本は必要です。良いお手本が見つかる素晴らしいと思います。佐藤一斎が書いた言志録のなかに「太上は天を師とし 其の次は人を師とし 其の次は経を師とす」とあります。一番良いのは、天地自然をお師匠さんに出来る人。二番目は人格が凄まじい勢いで自分に迫ってくるような人物に会えるかどうか。その人物をお師匠さんに出来れば素晴らしい。周りにそういう人物がいなければ、良い書物に廻り合うかどうか第三番目です。その三

つを佐藤一斎は紹介しています。

【二】 子曰く、黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず。何か我に有らんや。

黙って覚え、ずっと学び続けても飽きないし、人を教えていても嫌にならない。このようなことは自分にとって何でもない。

孔子は軽く言っていますが、これは孔先生しか出来ないことで我々には真似ができない、とお弟子さん達は思っているわけです。こういう人物が教育者にいれば素晴らしいと思いますが、見当たりませんか。これから出るのかもしれませんが。

【三】 子曰く、徳の修まらざる、学の講ぜざる、義を聞きて従ること能わざる、不善改むること能わざる、是れ吾が憂なり。

孔子が言うには、仁義礼智等の徳が自分では納得がいけない。学問の勉強が足りない。忠告を受けて納得しても、従うことが出来ない。間違いを知りながら直そうとすることが出来ない。これが私の心配事である。

皆、誰もそうだと思います。自分には仁徳があるだろうか、勉強が足りているだろうか・・・自分に置き換えて考えてみるとよろしい。

【四】 子の燕居するときは、申申如たり、夭夭如たり。

孔子が役所から自宅に戻った時には、ゆったりとして、顔色良くニコニコしている。

のんびりゆったり、顔を見るといつもニコニコしている。そういう生活が良いですね。

【五】 子曰く、甚だしいかな、吾が衰えたるや。久しいかな、吾復夢に周公を見ず。

私の衰え方は酷いものだなあ。もう長い間、夢で周公を見なくなった。

孔子は若い頃は、常に周公旦を夢に見たのだと思います。周公は周の文王の子で、武王の弟です。周の法律制度を作り周王室の基礎を定めた聖人と云われますから、孔子から見ると理想像なのでしょう。孔子は自分が理想とする人を、何度も何度もかつて夢に見ていた。それが夢に出てこなくなったと思い、私の衰え方は酷いものだなあと愚痴をこぼしたわけです。年をとると体力が衰えてくる。だんだん食べられなくなってきます。自分の寿命も終わりに近づいたなと思って、こういう具体的なもので孔子が歎息したのだと感じます。

自分が衰えたなと思う時期は誰でもあると思います。私は意識的に、一回り二回り上の人とお会いするようにして、どういう健康術をしておられるか聞くようにしています。先ほどお話しした三浦雄一郎さんは、死の四重奏と言われて一念発起して、身体を治す努力をし始めました。私も死の四重奏の入り口だとドックで診断されて、それから生活スタイルを変えています。私が一番「吾が衰えたるや」と思うのは、自分の腕を摘むと皺の富士山のように伸びるのです。それが3ヶ月間くらい腕立てをしていると、皺がだんだんなくなってきてピンと弾くようになってきましたから、これはまだまだ大丈夫だと感じています。

自分の体力に自信がついてきているなと思うと、1年があつという間に過ぎたという感じがしません。他にも色々な運動をしていますと、自分の身体が若返るとは申しませんが、衰えたなと感じるのに歯止めがかかる。ちょっと体力が戻り始めたなと実感すると、1年は結構長く感じます。

1年が短く感じるか長く感じるかは、自分の日々の生活の過ごし方で変わります。頭と身体と両方を鍛錬すると、時間は結構コントロール出来るような気がします。孔子はそういう鍛錬をしなかったのでしょうか。食べ物に関してはかなり気を遣っていたけれども、運動をしたということは記録にあまり残っていません。しかしあれだけ容貌乖離、大男で力自慢でしたから、何かやっていたのだらうと思います。

【六】 しいわ 子曰く、みち 道に こころざ 志し、とく 徳に よ 據り、じん 仁に よ 依り、げい 藝に あそ 遊ぶ。

学問を修める順序を言っています。

まず、道に志す。・・・人としての道を身に付けたいと思うのが一番である。

次に、徳を身に付ける。・・・心が人としての道に適ってきて、学問の根本が確立してくる。私欲がなくなってきた、だんだん仁徳があるということで周りから人が集まってくる。

次に、仁人になる。・・・完全に私欲がなくなって、心の中の徳も完全に完成した人物に

なる。

最後に、藝に遊ぶ。・・・学問の材料である礼・楽・射・御・書・数を身に付けて、自由自在に使える。且つ、心の中は徳で埋まっているような状況になる。何かをする時に、自分自身の身体と一体化する。例えば本を読んでいて、本の中に書いてあることと自分自身の体験とが一体化してしまって、自分自身が体験したような感覚で本が読めるし、動くこともできると捉えて下さい。

なかなかこういうことは出来ないだろうという気持ちが入っていますが、学問を身に付けたいと思う人は、まず人の道を志し、徳を身に付け、仁人になり、最後は芸に遊ぶ所までいけば文句はない。最高の人生だと言っています。

【七】 子曰く、束修しゅうしゅうを行うおこな自りよ以上いじょうは、吾われ未だいま嘗てかつ誨おしうるなこと無くなんばなあらず。

束修とは乾してある肉十本です。今でいう進物です。一番軽い贈り物と捉えて下さい。孔子が言うには、進物を受け取ったなら、私は今まで教えなかったことは一度もない。

以前私は、石川梅次郎先生のお宅に伺って論語を教えて戴いておりました。先生に「授業料はお幾らでしょうか」とお聞きすると、「帰れ」とおっしゃるので、封筒に束修と書いてお渡ししましたところ、先生は「ふむ、束修か・・・これは教えなければいけないな」と言われた言葉が頭に残っています。

【八】 子曰く、憤ふんせざればけい啓ひせず。排はっせざればいちくう発あせず。一隅さんくうをもつ拳もつぐるもつに、三隅さんくうをもつ以もつてもつ反かえさかえざれば、則すなわちすなわ復ふたびふたせふたざるふたなり。

憤というのは、公憤です。心の底からエネルギーの塊が湧き起ってくるものと捉えて下さい。

孔子が言うには、一所懸命学んでいるけれども、まだよく知ることが出来ないで煩悶している。そういう状況でなければ、教えてやらない。公憤を持っていない人に教えてあげようと思っても、響かないし覚えぬ。

心で分かっている口に出して言えないような状況でなければ、言い表せるように教えてはやらない。

一つの隅を説明すれば、あとの三隅は自分で考えることが出来る。そういう能力を持っていないなら、再び教えることはしない。一ヶ所を説明してあげれば、他の三つはこういう

ことだろうと類推して師匠に反問してくるような弟子であれば、弟子として認めるのは吝かではない。

【九】 子 喪有る者の 側 に 食すれば、未だ嘗て飽かず。子 是の日に於て哭すれば、
則ち歌わず。

孔先生は喪中の人のおそばで食事をする時には、お腹いっぱいまで食べることはしない。嘆き悲しんでいる人の前で、そんな無作法なことはしない。喪の哀しみに泣いている人がいれば、歌を歌ったりしない。

喪中に限らず、相手が嘆き悲しんでいる状況を考えてみれば、孔子の取る態度は腑に落ちると思います。

時事問題 民主党が政権をとって

自分の周りで何が起きているかよく見て、心の中がどう動いているかを想像する習慣を、我々はもっと身に付けなければいけないだろうと思います。新聞を見たり、論語を読んだりする時に一番肝心なのは、我と我が身に置き換える能力が必要です。

今年1年を振り返ってみると、民主党が政権をとって何か良いことがあったでしょうか。すごく明解に判断した方がよいと思います。民主党が政権をとった。首相が二人出た。その間に自分自身や自分の身の周りに、何か良いことが起きたかな・・・と考えてみると、何一つありません。

おまけに最近の新聞を見ると、2011年度の税制改正で、法人は実質5800億減税し個人は4900億円増税とあります。個人の場合も高額所得者に狙いを定めています。沢山稼ぐ人は何か悪いことをしているのだから罰金を取るというのは、明治時代から続いている思想です。もともと税金は沢山儲けた人から沢山取るのが当たり前という発想が根底にありますから、それを踏襲したのだと思いますが、それをやっていると全部一律平等でなければならない。幼稚園の運動会のかけっこで、一番速く走った子も遅かった子も、最後は手を繋いで一斉にゴールインするようなものです。そういうことを教え込まれた子供たちは、一所懸命走って一番になろうという気になりません。子供たちへのそういう教え方が悪平等で繋がって行って、どんどん怖い世の中になっていると感じます。先ほどの高額所得者の話も、相続税だけで見ても課税対象者が4万人から、今回の改正で7万人に増えるとい

うことです。目立たない所でちよろちよろと課税しています。民主党が政権をとってばら撒きをする。あちこちにアドバルーンを揚げた後始末をするのに、財源をどうやって作るうかといった悲しくなるような話ばかりが新聞に出ています。もっと日本の近未来、国家戦略、大きな日本の国のビジョンを描いて、その中に税金の体系も入れるということがなければいけないと思います。しかしながら、これが出てくるにはまだ数年かかると思います。目の前の選挙ばかり気にする今の政治家では、それは無理でしょう。

民主党は余計な問題を自ら作り出しました。小沢さんの問題は身内の中の酷いものです。普天間問題は昨日、菅さんが沖縄県庁に行って謝罪をしたそうですが、何と遅いのでしょうか。頭の中にあるのは、選挙だけです。尖閣諸島も北方領土も菅さん自身の問題も、皆ひっくるめて、一日でも長く総理大臣の座にしがみつくとどうしたらよいかという観点で動いている。そうとしか見えません。民主党全体を眺めると、民主党の県議や市議から、今のままでは選挙を戦えないから何とかして欲しいという声が多いので、党として次から次に国民にゴマをするようなことをしています。

ですから、世の為・人の為にしようとしているのか、民主党が票を沢山取りたいがためにしているのかを見抜きながら、手を打ってあげればよいと思います。

来年のキーワード 「ほどほど」

最後に基本哲学の知足の面から、「ほどほど」に関して申します。

昨日、或る会社の会長と話しをしました。12月いっぱい会社を閉める決断をしたのですが、「夫婦二人の年金でほどほどに暮せるけれども、なかなか引退できない」と言っていました。

ほどほど・・・その方は以前から「分に応じた暮らし」という言い方をしていました。我々も「ほどほど」ということを、もう一度見直しする必要があると思います。例えば、月々幾らあれば、ほどほどの暮らしができるか。「ほどほど」は人によって違います。その人が今まで生きてきた集大成のようなものだと思います。自分における「ほどほど」はどんなものか、お金だったら幾らくらいか、どういうイメージかを考えて載せて、来年につなげると良いと思います。来年の自己防衛として、「ほどほど」が大きなキーワードになると思います。「もっと、もっと」でやっていたら、来年は大変なことになります。「ほどほど」というキーワードで来年過ごして戴くがよいと思っています。

時間が参りました。本日はこれで終了に致します。良いお年をお迎え下さい。